

【1～2小節】おい、おい！

【3小節】あーよっしゃいくぞー！

【4～8小節】タイガー！ファイヤー！サイバー！ファイバー！
ダイバー！パイパー！ジャージャー！

【Aメロ】神子様！（手拍子）布都ちゃん（手拍子）とじとじ！
（手拍子）娘々！（手拍子）芳香！よ～しよし！（手拍子）

【サビ】おー！フッファー フワフワ はいせーの！はーいはーいはい
はいはいはい

【間奏】言いたいことがあるんだよ
やっぱり神子様かわいいよ
好き好き大好きやっぱ好き
やっと見つけたお姫様
俺が生まれてきた理由
それはお前に出逢うため
俺と一緒に人生歩もう
世界で一番愛してる
アイシテル



Ota YURI WORKS 14



プライベート ファンタム ペイン / ピンク パンティーズ

Anne Shirley

登場人物紹介

■ PPP/PP (主役チーム)

伝説の聖徳王	豊郷耳神子
伝説の悪女	物部布都
伝説の亡霊	蘇我屠自古
伝説の邪仙	霍青娥
伝説の宮古芳香	宮古芳香

■ 濃いめ射精 (ライバルチーム)

伝説の天邪鬼	鬼人正邪
伝説の正体不明	封獣ぬえ
伝説の無意識	古明地こいし

■ パープル・すみれ団 (ラスボス)

伝説の念写記者	姫海棠はたて
伝説の魔女	パチュリー・ノーレッジ
伝説の求聞持	稗田阿求
伝説のメガネ	宇佐見堇子
伝説のすきま	八雲紫

■ ちょい役 (Special Thanks)

伝説の夜雀	ミスティア・ローレライ
伝説のあれ	摩多羅隱岐奈

もくじ

p.6 WHERE'D YOU GET YOUR FUNK FROM?
はじめに：どうやってアイドルになったの？

p.11 ALL THAT IS GOOD IS NASTY
I. よろしきもの、すべていやらし
たわむれはおわりじゃ！／われにおまかせを！／やってやんよ！／
あらあら手に取ってしまったのですね？／ちーかよーるなー！

p.35 SLIPPIN' INTO DARKNESS
II. 闇のなかへと消えていく
決戦！サガファンクフェスティバル！／
5P vs 濃いめ射精！もう、出ない！／あのバンド

p.55 I WANNA TAKE YOU HIGHER
III. 君をもっと高いところに連れていきたい
ライヴ・アット・ジ・飛鳥／ジュテーム・ラ・ディスコティーク／
歌は幽霊の言葉／対バンハッたらダチだぜよ

p.71 DANCE WIT ME EXPRESS YOURSELF
IV. 一緒に踊ろう、自分らしく
決着！サガファンクフェスティバル／自分自身の音楽／
それはファンクの究極なる姿／歌は幽霊の言葉.Part II

p.101 MIRROR BALLS
おわりに：泣きたくなくなるような安っぽい歌

楽曲紹介のコーナー

- p.28 スパゲッティはおやつじゃない
p.43 ココはメロンソーダ

はじめに：どうやってアイドルになったの？
WHERE'D YOU GET YOUR FUNK FROM?

我は物部布都。太子様に仕える豪族であるぞ。そして、アイドルだ。この本は我らのアイドル・グループ、PPP/PP (Private Phantom Pain/Pink Panty's、通称5D) の活躍をばーつと記す目的でこれから書かれる。

といっても、不安であるな。我、学校の作文もにがてだったからな。学校というのは、飛鳥時代の豪族学校で、太子様はいつも主席でビリビリ

いま「ビリビリ」と書いたのは、屠自古から「そんなのはいい」とビリビリをくらったからだ。ビリビリというのはあいつの電撃のことで、これが痛いのだ。

で、学校の話はいらんとのことだ。じゃおぬしらもう忘れただろうから、もういちど書くぞ。これを書いているのは、我。物部布都だ。太子様に仕える豪族で、尸解仙である。尸解仙というのは道教をまなぶものが仙人になる方法のひとつで、いちど死んだあと蟬が殻から抜け出るようにして生まれ変わるのだ。そのあとここ幻想郷で弾幕をやったり、火事をおこしたりして楽しく暮らしておったのが、まさかアイドルになるとはわが風水をもつてしても見抜けなかつ

た。太子様の考えることはいつもながら我らを超越しておられる。

我らというのは、通常おぬしらを含めたあらゆる衆生を指すが、この本では我らのアイドル・グループ、PPP/PP (Private Phantom Pain/Pink Party's、通称5P)を指す。この5Pはいろいろあって結成し、なんやかんやあって最強のファンク・アイドル・ユニットとして成長する。そしてついにはあの最強のバンドとの対決をむかえる。そのいつさいを書くのがこの本の眼目であるのだ。

話の流れるにかなり唐突であるが無視して、ファンク哲学の公認最高権威ことジョージ・ファンケンスタイン博士「クリントンの言葉をここで紹介しよう。

ファンクというのは、中身がなんであるにせよ、そのときの必然性に応じているもの。

ジョージ・クリントン

というわけで、我らも必然性に応じて集まったのだ。ではメンバー紹介をおこなう。

いや、おこなう、と書いたが、おこなったほうがよいのか？ おぬしら、もうしってるである？ あんまりいっぱい書きたくないのだよ。我、学校でも作文がにがてで、学校というのは
ビリビリ

ええと、メンバー紹介であるな。最低限だけすればよかる。

まず、我らが不動のセンターにして親愛なる指導者、豊聡耳神子様である。我は「太子様」とおよびするが、「神子様」とよばれたり、畏敬をこめて「聖徳王」とよばれたりもしているな。多少なにいつてるかわからんところもあるが、たいへん偉大なお方であるのだ。イケメン女子であることから女性人気が高く、「なんかご利益がありそう」という理由からグッズの売り上げはいちばんだ。あがめよ。

次、蘇我屠自古を紹介してやろうか。ない脚をいかしたダンスがとくいで、MVではいつも華麗なステップを披露している。太子様に一途であることと、儂げな見た目のため男性からも女性からも人気だが、実態はただのヤンキー女でいつも我や青娥どのをビリビリするのだ。あとおっぱいがでかい。

我、物部布都。カワイイ担当のアイドルだ。太子様もたいがいがだが、幼女度では我に軍配があがるな。ちまたでは「幼女系悪女」とよばれている。もつとも我はひかえめな人柄で、歌もダンスもへたっぴだから比較的メディア露出はすくなかったのだが、でもすっごくかわいいから一番ファンが多かった。

次に紹介する二名は、デビューから同じグループであった先の三名とはちがいが、もとは別グループ『Pink Panty's』のメンバーだった。このPink Panty'sと我らが合体したことにより最強のファンク・アイドル・ユニットが生まれるのだが、どのように生まれたのかは先の紙面に

ゆずるとしてまずは紹介しよう。

霍青娥どの。伝説の邪仙で、その邪悪なことときたら全員クズである幻想郷の住人たちのなかにあってなお比類ない。グループ内の立ち位置は当然ながらおいろけ担当だが、いっぽうで後述する宮古芳香との百合営業もたいへんに巧みだ。クズだな。

宮古芳香。青娥どのの相方にして、幻想郷ぜんたいを見回してもなかなかいないほどのピュアガールであり、生前は伝説のアイドルだった。トークがにがてなのでダンス担当になるかと思いきやえらい美声でソロ曲を歌う。リョナ好きの変態どもから人気が高い。

この五名でファンクするのが、我ら最初期の *Private Phantom Pain/Pink Party's* である。この本は我らの活躍を記す……って、もう書いたし。それに、だ。我思うんだけど、おぬしら（これを読んでいるおぬしらのことだ）そもそも我らのファンなのだろう？ であれば、もうだいたいのことはしってるであろう？

だから、できるだけファンがしらないことを書こうと思うのだ。おぬしらがしらないこと、という……実は我、アイドル活動略してアイカツをしながら、ずいぶん悩んでいたのだよ。ちよつと照れくさいのだが、これからそういうことを書こうと思っている。

あたりまえのことであるが、これから書く悩みは、我にとって当時のままではない。というのは、悩みがすっかりなくなってしまうた、ということではなくって、月が満ちてまた欠けるみたいに、ツモるたびに麻雀の待ちが変わるみたいに、「悩み」は日々どんどん変化していて、

昔のかたちのままの悩みがもしあったとしても、それはもう「思い出」になっているのだな。と書いてもようわからんだろうけど、読んでもらううちに、だんだんわかってもらえたらいいと思うている。そういうことも含めて、書いていけたらいいなと思うているのだ。ではではご笑覧あれ。

物部布都

第一部

ALL THAT IS GOOD IS NASTY



■このパートで重要なこと

- ・豊聡耳神子・物部布都・蘇我屠自古がアイドル・グループを結成する
- ・はじめてのゲリラライブは失敗する
- ・蘇我屠自古がガタリンピックで優勝する
- ・豊聡耳神子は霍青娥と宮古芳香のユニット『Pink Panty's』と組むために自爆テロを執行する
- ・かくして最強のファンク・アイドル・ユニット『Private Phantom Pain/Pink Panty's』が誕生する
- ・宮古芳香のキャリアがあきらかになる
- ・物部布都は自分がアイドル活動も、音楽それ自体も好きじゃないと思う

§1.1 たわむれはおわりじゃ！

忘れもしないある日のことである。ある日というのは、日付はしらんが我らが復活してからずいぶんたって、宗教戦争や都市伝説異変も終わったあとのある日だ。太子様はいつもどおり霊廟で修行していた。太子様くらいになるとえらいのもう自分のために修行をする必要はないのだが、ではなんのために修行しているかというところ、我ら導くべき衆生のためだ。太子様はえらいのでつねに世の中ぜんぶのことを考えておられる。

だから太子様は忙しいので、我はあまりじゃまできないのだ。で、我はその日隣んちに行つて一輪（※1）と遊んでいた。一日じゅう遊んで帰つてくると、太子様は銀のお皿でメロンを食いながらバスローブを着て膝の上の宮古芳香をなでながらブランデーを飲んでいた。

おお太子様、風呂あがりですか。と声をかけると、酒に弱い太子様は頬を李のように染めておられる。にっこり笑つて「泥だらけではないか。早く風呂に入つてきなさい」とのこと。それで風呂に入つてあがると、おいておいたはずの服がない。かわりに用意されていたのが、このトレーニン

※1 雲居一輪。命蓮寺で修行している尼僧で、雲入道を使役する妖怪。気のいい奴であるが、異教徒であるので我らとは敵対関係にある。太子様と我はいわゆる黄昏ゲーでブレイヤーキャラクターとして共演した仲。パンチ力がすごい。おっぱい大きい。

グウエア(※2)であった。

新しいねまきかなとおもい袖を通し太子様の部屋へもどると、太子様もトレーニンググウエアに着替えていた。我はこのときジャージ姿の太子様をはじめて見た(※3)。ジャージのすそから太子様の精神の輝きがじゃぶじゃぶと寝小便のようにあふれて、まるで女子小学生のようだった。驚く我に太子様はこう言った。

「どこまで説明したかわからないが、明日人里でゲリラライブをやる。ちなみに私が悪堕ちしたら声優は戸松遥だ」

「何で？」

我らはしばしお茶を飲んでおちついた。で、屠自古に会いに行った。屠自古は庭で薪ざっぱうを持って剣の稽古をしていた。月夜の庭で薪ざっぱうをぶんまわし「チェスト! チェスト! 誤チェスト!」と叫ぶ屠自古の姿は鬼気迫るものがあり、我などは見えていて血の気が引く思いなのだが、太子様が声をかけるとF1のような猛スピードでばっと振り向き駆け寄ってきた。

「なんだよ! なにか用か! はあはあ。なんだ、そのかっこ! かわいいな! はあはあ」

※2 アニメ『ゾンビランドサガ』(© ゾンビランドサガ製作委員会)の水野愛のアニメキャラブチャ画像を貼るつもりで途中まで作っていたのだが、調べてみるとどうあっても著作権法違反であるので断念した。無念。

※3 断じてギャグマンガ日和ではない。

「屠自古、落ち着いて。ふふふ、まるでりんごを奪われた青森県民のように息切れしているぞ。きみをアイドルにしてあげる」

「何が？」

屠自古はなぜか我を思い切りならみつけた。それからそろってトレニングルームへ行った。屠自古もトレーニングウェアに着替えると、いつもとちがうかっこうが楽しいのか、壁いちめんの鏡に向かってポーズをとったりくるくる回っているような角度で自分の姿を映したりしてキャピキャピよろこんだ^(※4)。

「それで、明日人里でゲリラライブをやる。いまから我々のデビュー曲を聞かせるので、練習をはじめよう」

「それだとゆわれても」

あとで聞いたところ、この日太子様は衆生を救うためにAmazonプライムビデオであるアニメを見て、アイドル活動略してアイカツをすることを決めたのだそうだ。そして我らはあの曲を聴き、踊り、歌った。泣きたくなるような安っぽい歌だった。

※4 可愛い(神子注)うるせえぞ!(屠自古注)

§1.2 われにおまかせを！

尸解仙は道教における仙人のむにやむにやで、と、これはもう書いたな。ようするに我らは長生不死の存在で、寝ずとも死なんのだ。だから徹夜で歌詞と振り付けを覚えた。翌朝の通勤時間帯の人里J-R駅前(※1)に舟(※2)で乗り付け我らはようすをうかがった。ゲリラライブをやる肚だが、ゲリラというくらいだから無許可なので警察につかまったらしこたま怒られるだろう。

「しかし太子様。なんぞアイドル」

いまさらのような私の疑問に太子様はにっこり笑ってお答えになった。

「佐賀を救うためだ」

幻想郷の佐賀こと神霊廟(※3)は過疎化が進み、急激に人口が減少しつつある。とくに若者がずんどこ減り高齢化問題は深刻だ。後継者不足による老舗企業の倒産数は幻想郷の九州のなかでも多くを占め、生活の要である商店街が廃れている現状もめずらしくない。過疎地域が含まれる市町村の数は神霊廟の半数に広がりつつあり、もはや時間の問題といってもいいだろ

※1 物部氏の氏神である饒速日命(ニギハヤヒノミコト)が降臨したときに乗っていた天の磐船のこと。外の世界では大阪府交野市の磐船神社で御神体として祀られている。これが幻想入りし我が乗るとなんか木でできたポロい舟になる。舟に当たり判定もある。なぜだ(布都注)。なぜといわれても(神子注)。なんでおまえがしらないんだよ(屠古注)

※2 今後神霊廟をさして「サガ」と表記する。

う。だからいまこそこのサガには常識をひっくり返すなどでかいインパクトが必要なのだ……

太子様はホワイトボードに図を書きつつそう力説した。正味なんのこっちゃわからなかったが太子様が世を憂いてなにやらマジカルなミラクルをおこすのはいつものことだ^{※3}。我は水飲み鳥のようにこっくりうなずき、「われにおまかせを！」と叫んだ。

大声を出したので周りにばれそうになってひやひやしたが、とくにだれも我らに興味はなかったので通り過ぎるだけだった。我らはこそこそスピーカーやらなんやららの音響機材を運んでセッティングし、広場のセンター^{※4}に並んで立った。衣装は、本式のものはまだ用意できなかったのでもろい色違いのTシャツと、ミニスカートの下にフリルフリルりの見せパンだ。我、こんなかわいいスカートとパンツをはいたのははじめてで、それだけですっごくテンションがあがった。ほんとうにかわいいのだ。

で、太子様が小さく声をかけた。「ミュージック、カモン！」
スタンド型の小型スピーカーからちゃんちゃんか音楽が流れ出た。太子様が歌いだした。声がふるえていた。

人前であの曲を歌ったのはこれがはじめてで、だから失敗したのもこの

※3 飛鳥時代からなれている。Fの召喚獣のごとく持国天や増長天を喚んだこともある。ほんとはびっくりしたよ。

※4 幻想郷の人里の駅前、唐津駅北口の駅前広場に似ていること有名。

ときがはじめてだったよ。思い出すと、いまでも心臓がばくばくするな。我、尸解仙で皿だから、心臓があるのやどうやらわからんが、そうなるのだ。

いつも朗々としてゐる太子様の声はまるで幽霊の歌声みたいに薄くかすれて、音程がふらふらし、聴いていて不安になるしろものだった。我も屠自古もうえつとなつたが顔には出さずに、なんとか平静をよそおつて踊りつづけた。振り付けは体に覚え込ませていたので、ぎりぎりまぢがいなく動くことができていたが、それも紙のようにたよりなくて、風が強い日の洗濯物みたいに、一小節ごとにどこかにふつとんどでしまいそうだった。我のパートがはじまつたので、我も歌いだしたが、笛と太鼓が勝手に体のなかで鳴つてるみたいで、ちつとも調子があわなかつた。屠自古もおんなじで、我らはそろつて不安定で宙ぶらりんで、止まりそうなコマみたいだった。

ずいぶん長いこと歌い、踊つた気がしていたが、一分も経つていなかった。ステージに見立てた広場を、我らは歌いながら振り付けどおり歩いて横切り、ぶつかつてこけた。だれが悪くてまぢがつたのやら、わからないう。で、全員歌詞がとんで、歌が止まつた。地面に座り込んで、あたふた

混乱している我らを見て、里のみんなが笑った。

いま思い出しても悔しくて吐きそうになるが、準備不足だから仕方ないよなあ。こうして我らの最初のゲリラライブは、まるきり失敗に終わったのだ。ほうほうのていでサガに逃げ帰った我らは世界の終わりみたいな顔してミーティングをはじめた。で、最終的には屠自古が「やってやんよ！」と宣言するのだが、どのようにしてやってやんよったかは次の章にゆずろう。

1.3 やってやんよ！

「それで、次のアイドル活動略してアイカツなのだが、サガファンクフェスティバル(※1)に出ようとおもう」

「なんだ、それ？」

「太子様、ちょっと待っておくれ」

かねてより思っていたことだが、太子様は説明不足である(※2)。つきつめていえば、我と屠自古は太子様と遊べるのならなんでもよいのだけでも、まじめにアイドルで天下をとるとなればももクロ(※3)の例をみても一筋縄ではいかぬ偉業であろう。なんぼ我らがスパーカわいい集団とはいえ苦労すると思う。我はスパークールな風水頭脳でそう考えたゆえ、ここでストップをかけたのだ。

ストップをかけたはいいがべつに妙案があるわけではなかった。屠自古は我とおなじく「うむ、わからん」という顔をしていた。

「そもそも、アイドルってなんだ？ おまえ、わかるか？」

「うーん……」

※1 摩多羅隱岐奈主催によるサガ最大のファンクフェスティバル。幻想郷の嘉瀬川河川敷で毎年行われる。詳細は後述。

※2 他人の欲の声が聞こえ喋らずとも考えていることがわかるため、自分の心も相手に伝わっているのだと勘違いしてしまう。あるいは太子様の隔絶して強大な自我が他者を影のように見せしてしまうのかもしいし、逆に周囲の我ら凡俗の心が水のように太子様の心を浸してしまうのかもしい。

(布都注)

幼子のような屠自古の問いに、我は答えられずに口ごもってしまった。
アイドルとはなんだろう。ステージの上からみんなを魅了するものだろうか。がんばる姿を見せることでファンに勇気をあたえ、歌とダンスでみんなをひとつにするものだろうか。苦悩する我らを見て、太子様は「迷わずいけよ、いけばわかるさ」と教え諭した。それからこう仰った。

「**ファンク**とは本能として存在するもので、抑制しようとする者もいるが、本質的にだれにも抑制できないものなのだ。熱気むんむんのダンスフロアーから新しいダンスが生まれるとき、安物のコロンをふりかけすぎるとき、ぶ厚くて紅い唇にさらに派手な口紅を塗るとき、そこには**かならずファンクが存在するんだ**」

「は？」

「**アイドルは？**」

我と屠自古は同時につっこんだ。太子様はいつでもどおり、全盛期の猪木のように不敵に笑うだけだった。

こうして我らはいちから地道な活動をはじめたのだ。目標はサガファンクフェス出場としても、まずは知名度をあげないと話にならない。というわけで鹿島踊りの練習会に参加したりガタリンピックに出たりした。ガタ

なにいつてんだ、おまえ？(屠自古注) 布都は良い子だ(神子注)

※3 ももいろクローバーZ。百田夏菜子、玉井詩織、佐々木彩夏、高城れいの四人によるガールズユニット(二〇一九年現在)。メジャー・デビューシングル『行くぜっ!怪盗少女』にカップリング収録された『走れ!』が超名曲で、岡村靖幸の『あの娘ぼくがロングシューター決めたらどんな顔するだろう』とのマッチアップ作品が超クール。

リンピックの第二種目のあのなんかターザンみたいなやつで、屠自古がわやガタ^(※4)を飛び越えるほどの大記録を出し、一位になって表彰台のうえでんばって「や、やってやんよ！」と叫んだ。そのとき「そういえばグループ名を決めていなかったな」と我も太子様も気づいたので相談して我らのアイドル・グループ名 **Private Phantom Pain**^(※5) が決定した。

しかし、なかなかうまくいかなかった。多少はひとめにつくようになり、ちょこっとYouTubeに動画があがったりしたものの、VirtualYouTuberの人気におされるなどして思うように人気は出ず、まったくだめとはいわないものの活動はジリ貧であった。そこで太子様が考えた策が、すでにいるアイドルグループとしてばっちり評価をえていた霍青娥どのと宮古芳香の **Pink Pantys** と合体することだったのだ。

※4 干潟

※5 どうだカッ
コイイだろう(神
子注) 厨二だな
(屠自古注) 厨二
ですな(布都注)

§1.4 あらあら手にとってしまったのですかね?

Pink Panty'sは二〇〇〇年以降のアイドル戦国時代において二〇〇八年に幻想郷いちのアイドルグループの座を獲得（その後陥落）。当時のインタビュ―にこたえてうそんなこのリーダーである宮古芳香（※1）は「失敗や後悔を全然だめなことだと思っていない、絶対次につながることをだから。そういうのぜんぶ踏み越えた先に、誰にも負けない自分がいると思うから」と名言をのこしている。

ひらたくいって青娥どのがアイドルの枠を越えてクツソエロいのと芳香がバカでかわいくて、あとすべての衣装で下着がピンクのパンティーで統一されていてそれをダンスのたびにチラツチラ見せるもんだから男性を中心にすごい人気であった。青娥どのおいっしょにされても我らたいへんこまるのだが、まあいちおうのところそういう言い方を好んでするのであれば仲間であると言って言えないこともない関係であるので、対外的には我らは「すごいでしょ」と自慢していた。だから太子様がアイドルをやるといふなら、なんであれ避けて通れない相手ではあったのだ。

※1 真のリーダーが青娥どのであることはだれでも知っている。「私は慎ましくて謙虚ですの」と青娥どのはのたまうが、めずらしいことにこれは事実で、自分が目立つよりもかわいがっている芳香を自慢したいのである。

※2 ストリートファイターシリーズのブランカの必殺技

いそがしいライブツアーの合間に自宅でうどんを食べていたふたりに我らは声をかけた。話もちだしかけたところ「**うどんを食い終わるまで待て**」と言われたので待った。

うどんを食い終わるのを待ったあとであらためて正式に「合体しよ♥」と話すよ、

「嫌ですよ。あなたたちみたいなの、デビューもない、人気もない、すぐ消えそうな**ファンクアイドル**と組んで私たちになんのメリットがあるんですか。お味噌汁でお顔じゃぶじゃぶしてきなさい」

としごくまっとうなことを言う。すると道理の通じない屠自古が「なんだとテメー！」と叫んでエレトリックサンダー(※2)で青娥どのと芳香をビリビリの黒焦げにしたので、はなからまとまる可能性のなかった交渉は完全に決裂した。

しかし読者はしっておるであろうが、こんなどうしようもない展開でも我らは合体するのだな。アクエリオンのように。ではどのようにしてそうなったのか書いていこう。

漫画『へうげもの』(※3)の第一話に着想を得た太子様が、「私たちと合体するんだ！ でなければ爆死する」と体にダイナマイト巻き付けて自爆テ

※3 ◎ 山田芳裕。第一話で信長を裏切った松永正が平グモに火薬をつめてぼーんと爆死する。ぼらばらになって吹っ飛ばす平グモの蓋の破片を集めた古田左介が信長にそれを差し出して「無残な姿になり果てました」。それを見た信長、「うひゃひゃひゃひゃ」と大爆笑。なにがなんだかわからないが、山田芳裕先生のひょうげた絵柄とダイナミックなコマ運びが面白いって、読んでるこっちもうひゃひゃひゃひゃ。

ロに出たのだ。青娥どのはアナ・コッポラのようにぐぬぬとうなった。青娥どのはとして太子様が死ぬのはかまわないが（どうせ生き返るし）巻き込まれると痛いし家がふつとぶのもこまる、といったところだろう。

「落ち着いて、豊聡耳様。あなたはいまとても近視眼におちいつている。ポガンとなったら、すつごく痛いよ。私はあなたのためを思って言っているですよ」

「青娥娘々よ、私には貴方の欲の聲が聞こえる。私の健康を気遣う気持ちなどさらさらなくて、ただ自分が痛かったり、ねどこがふつとんだりするのが嫌なだけだろう。そんな心のこもらない歌声では、誰かの気持ちを動かすことなどできやしないのだ！」

「即席でも、本気ならそれは伝わるんだぜ」
「本気ならね！」

屠自古と我が水野愛の名言をまねして茶々を入れると、もともと産卵前のウミガメのように厭世的な顔をしていた青娥どのの顔がさらにひん曲がり、まるで『アベンジャーズハウス・オブ・M』^{※4}でスカレットウィッチの現実改変能力によりミュータントが支配する世界へと変化した世界でプロレスラーとして生計を立てグウェン・ステイシーと結婚し子供まで

※4 マーベル・コミックから二〇〇四年より出版された全8号のリミテッド・シリーズ。あまりにも有名なため詳細は省くが、スカレットウィッチさんの傍迷惑ぶりが天元突破したもつとも顕著な例であるといえよう。

いて幸せの絶頂だったピーター・パーカーがウルヴァリンから「ぜんぶウソだよ」と告げられたときのようであった。いや、言いすぎた。そこまではなかった。でもすんごくイヤそうだった。

「自爆テロはよくないぞ」と芳香が冷静に言った。我らはそりやそうだとうなずきつつも都合が悪いので無視した。

「さあ、覚悟は決まったか。おとなしく我々と合体するがいい。ズツボズツボと」と映画『キャプテン・マーベル』^(※5)で主人公のキャロル・ダンバース（ブリー・ラーソン）に上から目線で説教するヨン・ロッグ（ジュード・ロウ）みたいな表情の太子様。

「これだけは言わせてくださいませ」と、映画『スパイダーマン…スパイダーバース』^(※5)で、ヒーローになってまもないためやる気は見られるものの未熟で能力をうまく使えない主人公マイルス・モラレスを異世界への帰還ミッションから外そうとするベニー・パーカーちゃんのような表情の青娥どの。

「私は強いものに惹かれるたちの女です。邪仙に身を墮としたものの、もともとはただ何仙姑様にあこがれ、かのお方のようになるべく修行を重ねてきたのです。この国に来て、あなたに道教の秘術を授けたのも、ただあ

※5 二〇一九年公開。MCUシリーズ第二十一作目なんとキャロルがスクラルの味方というビックリ展開（ねたばれ）

※5 二〇一八年公開、第九一回アカデミー賞長編アニメ賞受賞。スパイダーマンの映画としては初のアニメ作品であり、またピーター・パーカーではなくマイルス・モラレスを主人公としているもの（たぶん）初みんな大好きスパイダーグウェンも出る。日本では後述のベニー・パーカーちゃんがすごい人気になった。

あなたの才能に魅入られたからです。そんな私がなぜアイドルをやっているのか、あなたはすでにおわかりでしょう」

太子様はふむ、とうなずいた。それからこちらをちらりと見た。以前に私が注意したことをおぼえていてくださったのだ。

「他のものにも伝わるよう、私が代弁してあげよう。青娥がアイドル活動略してアイカツをしているのは、大勢の人間に自分のパンツを見せたいというよこしまな思い(※6)もあるものの、それが第一ではない。目的のおおよそは彼女を倒すことにあるのだ。そしてその目的は、私も共有するものである」

太子様はこんどは屠自古のほうを向くと、

「屠自古、私の諡号を言いたまえ」

「あ？ ギャグマンガ日和？」

「もつと真面目に」

「聖徳王」

「そう、聖徳王である。しかし聖徳の文字を変えれば『ファンク王』になる。そも、私が同時に十人の声を聞き、十七条のなんとかを作って国を治めたのも、すべてはファンクのためであった。そして機は熟した。いまこ

※6 そんな、ひとを痴女みたいにしても、みなさん悦んでくれるんですよ。うふふ。(青娥注)

そ我らは彼女を倒し、サガを救うのだ！」

我らはいちおうおーっとどよめき、それからちゃんと話を聞きだそうとがんばったところ、太子様がうっかり爆薬に火をつけてしまった。

「アツ、まずい、導火線が燃えてる！ 爆発する！」

「きゃー！」

太子様の体にぐるぐる巻きになっていたダイナマイトが爆発し、全員ボガンとふっとんだ。その爆発力たるやまるでマクロスダイナマイト7のようで、家も土地ものこらずこなごなになったのだったが、さいわい我らはみなつよいのでそろってアフロ・ヘアーになった以外は無事であった。

こうして我らは合体し、最強ファンク・アイドル・ユニット『Private Phantom Pain/Pink Panty's』が誕生したのだ。

つまり、こういうことだ。我らはそもそものはじめから、音楽的に彼女を越え、倒すためにこそ結成されたのだ。彼女というのがだれなのか、めんどくさいので早々に書いてしまうが、しつてのとおりあの・ソウルのゴッド・マザー・ファンキー大統領・こと**姫海棠はたて**である。

スパゲッティはおやつじゃない

作詞 宮古芳香

作曲・編曲 ミステイア・ローレイ

食べたいなスパゲッティ 今日ではそればかりかんだえて
食べたいなスパゲッティ Ahー

くちびるをつけてみたい 白くて赤いスパゲッティ 今夜
じゅるじゅるとすすりたい いま

タバスコかけてチーズもかけて ぽくぽく食べたい
好きな食べものはいつも「スパゲティー」と書く
見たことないくらいいっぱいゆでたい
春も夏も秋も冬も ずっとスパゲッティが大好き
でもいまは食べられない おなかがすいているのに いま
Ahー!

食べたいなスパゲッティ 今日ではそればかりかんだえて
食べたいなスパゲッティ Ahー
食べたいなスパゲッティ もうふるえちゃうくらい
食べたいなスパゲッティ いま
くちびるをつけてみたい もちもちのスパゲッティ 私
いつもスパゲティを食べたい 私

スパゲッティはおやつじゃない
スパゲッティはおやつじゃない
スパゲッティはおやつじゃない Ahー
スパゲッティはおやつじゃない



ヤッホー！ パープル・すみれ団の**姫海棠**はたてちゃんよ！
今日は妹分のアイドル・グループ『Private Phantom Pain/
Pink Panty's』の楽曲紹介をするわ！



おなじく、パープル・すみれ団の**八雲紫**です。おもしろおきを
ええっと、なんでしたっけ。パンティーのパンティーを紹介します
わ。



ちゃんとやりなさいよ。で、この曲だけど、彼女たちのメジャー・
デビュー曲……ってわけでもないわね。最初アルバムに入っ
てたやつだ。なんでいきなりこれ？ いい曲だけども。



かわいい曲ですわね。芳香の食欲がストレートに伝わってきます。
キョシーだからおやつにスパゲッティを食べてもたらないんでし
ょうね。うらやましい。



あんた今年の正月やばかったもんね。でも、そんなことはよくっ
て、この曲ね、ベースとしては複雑なんだ。こう、(ボーン、
ボーンパンッ、パドゥンパドゥンボーン)ってんじゃないかって、(ピン
ピンザーンザーン、ビッ)じんのこれ。



ベースラインがね。とても軽い。芳香のソロ曲なんだけど、芳香
の歌いかたもすごく高い金切り声で、それもなんだか「高い」だ
けじゃないかって、「薄い」感じ。



そうそう。なんか、**軟派**なのよ。ギターもアウトロとイントロだ
けで、鳴りはじめたと思ったらすぐにフェイドアウトしちゃう。ま
ともソロすら聴かせてもらえない。あるのは脳天気なキーボード
だけ。



とにかく、私たちとくらべると、登場する楽器が異様に少ないの
よね。はたての言いたいこと、わかるわよ。ようするに……「**ベ
ースなんてないほうがチャミングだ**」って言われてるような気
分なんじゃない？



そのとおりよ、ファック！ でも、それがいいんだからしよすがな
い。ベースやドラムのリフレインなしでファンクネスを成り立たせ
ちゃってる。この欠落、このアヴァンギャルド！ 魔法にかけられ
たみたいよ、まったく。

1.5 ちーかよーるなー!

こうして我らは**ONE THE ONE**のファンク・アイドル・ユニットとして活動を開始した。問題といえばドライブイン鰻※1のCM撮影時に芳香がミステイア・ローレライ※2を食うという異常事態が発生したもののそれくらいで、びっくりするほど順調にスターへの階段を駆けあがっていった。メンバー内の人間関係は悪く、なかでも屠自古と青娥どのが犬猿の仲で顔を合わせればビリビリ※3とか邪符「グーフンイエイ」とかだったが太子様がその都度なんとかした。そんな忙しい毎日を送っていたある日のことだった。めずらしく早朝に目覚めた我がふらりと海へゆくと、いつものふりふりのチャイナ服ではなく真っ白いワンピースを着た芳香が砂浜に座っていた。

なにしとんのだと声をかけると「落ち込んでるんだぞお」とのことだった。我はとんでもなく焦った。

「どどどどどどうしたのだ。異変か」

「私はよみがえった死体だ。生きていたころもアイドルをやっていて、そのころはいまみたいにグループで活動したことはなくて、ずっとひとり

※1 ミステイア・ローレライが経営する八目鰻の屋台。伊万里市大坪町に本店を、福岡県糸島市に糸島店をかまえる。社長自らが歌う「焼き鰻一番、鰻めし二番♪」のCMソングが有名。

※2 超有名飲食店を経営する実業家にして幻想郷最強の歌姫・天才ソウルシンガー。超時空夜雀といえは彼女のこと。芳香に食われながらも我らに楽曲提供までしてくれた。なんていい鳥。

※3 ストリートファイターシリーズ

でやっていたんだ。昔とのちがいに戸惑っているんだ」
「そうか。おぬしは我らより年下なのだったな。あっ」

「ああーっ」

芳香がかぶっていたつば広のハットが風に吹かれてふわーと飛んだ。海に落ちそうになった帽子を、我がつかまえてやった。帽子は無事だったが、我は海に落ちてびしょびしょになってしまった。

体を乾かしながら芳香の話聞いてやった。

「私のころは、あんなふうにはファンに奴らと個人で接することはなかった。握手会ならあったけど、でも、ステージと客席、ブラウン管とお茶の間のあいだ(※4)には、たしかな境界線があったんだ」

数日前に行われたチェキ会のことを芳香は話しているのだった。太子様をはじめ我らはノリノリでファンどもと写真を撮ったのだが、そんな我らを見て芳香はショックを受けたようです。突然「**ちーかよーるなー!**」と叫んでファンのひとり食ってしまった。超盛り上がった。

「アイドルはみんなに夢を与える仕事。ファンの奴らにいたらぬところを……ええと……巨乳……」

「許容」

ズのブランカの必殺技

※4 芳香が生き
ていた平安時代前
記は漢詩や和歌が
さかんで、一流の
詩人(あいどる)
である芳香は国民
的コント番組『宵
五ツだヨ!全員集
合!』などにもひ
っぱりダコだった
という。

「許容してもらおうことなんか、ありえないんだ。私が見てきたアイドルはみんなそうだった。かつて自分があこがれたアイドルのように、自分もあこがれられるようになりたい。その一心で、来る日も来る日もがんばって、毒爪『ゾンビクロー』などができるようになったんだ。これからだ、って、そう思ったや……ヤード・ポンド法……」

「矢先」

「矢先に、青娥に会って」

そこで芳香は口ごもった。みなまで言わずとも、我にはわかった。陳腐な言い方であるが、ひとにはときたま『運命の出会い』があつて、その出会いの前と後ではなにもかもが変わってしまうのだ。アイドルがキョンシーになったり、豪族のお嬢さんが尸解仙になったり……

こんなようだとは私はまた、チエキ会でファンを食ってしまうだろう、と芳香は嘆いた。我はああ、うん、とうなずくことしかできなかつた。うまいアドバイスができなかつたのは、我もまた問題をかかえていたからだ。芳香のような、アイドルの矜持うんぬんではない。それ以前の問題だった。実のところ、我はアイドル活動がさっぱり楽しくなかつたのだ。歌うこと、踊ることどころか、音楽そのものも好きじゃなかつた。というの

は、我、歌もダンスもみんなよりへたっぴなのだ。自分のソロ・パートがくると、声がふるえてしまうし、いつもどこかで音程を外してしまう。ダンスについても、なんかうまく動けなくなって、みんなとちよつとずれてしまうのだ。だからいつも、なさけない気持ちだった。

でも、我よりうまいとはいえ、太子様も屠自古も、青娥どのも芳香も、立派なアーティストとは言いがたかった。かわいいのはまちがいないから、みんな（おぬしらだ）から愛でもらうのにはじゅうぶんかもしれない。でもどうやったって、我らの目標である**あのバンド**と並べるレベルではなかった。それは我には、がんばってどうにかなるものじゃない、と思えるものだった。あのバンドにあこがればあこがれるほど、ものがちがう、というふうに思えてしまうのだ。

我がそう思っているのを、太子様はもちろんしっていたし、太子様だって我とおなじく思っているのになかった。屠自古も青娥どのも芳香も、みんなそうだ。

でも、そしたらなんでがんばるんだろう？ どうしたって**あそこ**には行けないとわかっていのに、どんなにがんばったって、それは夢みたい
に、幽霊みたいに消えてしまうものなのに、どうして我らはアイドルをつ

づけるのだろう。歌ったり、踊ったりすることに、なんの意味があるのだから？

第二部

SLIPPIN' INTO DARKNESS



■このパートで重要なこと

- ・サガファンクフェスティバルがはじまる
- ・秋穂子、秋静葉、博麗霊夢、東風谷早苗とたくさんの観客たちが死ぬ
- ・ステージの案内人が王大人に似ている
- ・パンク・ファンク・バンド『濃いめ射精』との死闘
- ・PPP/PPと濃いめ射精の闘いは意外な結末を迎える
- ・傷心のアイドルたちのもとへ**あのバンド**の音楽が届く

2.1 決戦！ サガファンクフェスティバル！

そうこうしているうちにサガファンクフェスティバルがはじまり、我らはつつがなく未来枠で出場とあいなった。書いていかなかったが、サガファンクフェスティバルとは摩多羅隱岐奈※1主宰のもと幻想郷の嘉瀬川河川敷で毎年行われる幻想郷最大のファンク・フェスで、毎年多くのファンク・ミュージシャンやファンク・アイドルなどのファンク人間「ファンク人間」が集まりトーナメント形式で覇を争う。優勝したアーティストは摩多羅隱岐奈のレーベルからアルバム・リリースが約束され、注目度の高さからその年のプラチナ・アルバムに選ばれる可能性も高い。我らあらゆるPの娘たち「DAUGHTERS OF THE P」にとって大チャンスとなるフェスティバルなのだが、そのわりに毎年十組前後と参加アーティストが少なめなのは、ファンクを衝撃波に変えた攻撃が許可されているため危険だからだ。プリバ※2なんかは出れば最強なのだが、必要がないので出ない。

とばーっと書いたが、わからんと思うし、読み飛ばされてるかなーとも思うので次に整理して書いておこう。

※1 秘神および地母神および星の神および養蚕の神および障碍の神および被差別民の神および能楽の神で、幻想郷音楽連盟の代表理事。とてもえらい。

※2 説明不要であろうがいちおう書いておくと、リズムリバー楽団の略で、バイオリンのルナサ、トラベットのメルラン、キーボードのリリカの三姉妹からなる幻想郷最強の音楽集団。「Pの娘たち」のPはプリズムリバーのP。

楽しい！ サガファンクフェスティバル国際条約

- 1、十組くらいのブラック・ミュージシャンの勝ち抜きトーナメントバトル（今年は八組が出場）
- 2、同時演奏ファンクバトルで相手を倒したら勝ち
- 2.22.1、自分たちのパフォーマンスで相手をうちのめしたら勝ち
- 2.2、ファンク衝撃波で相手をノックアウトしても勝ち
- 3、頭部を破壊されたものは失格となる
- 4、地球がリングだ！

とだいたいこれくらいこのルールで、あとはただわーつとやればいい、するとそのうち**宇宙と地上に同時に存在する**という**概念が生まれる**。内なる本質をそのまま解き放つのがファンクであり、だからそれは高まりであると同時に**低音的要素でもある**（※3）。ホットなのだが、クールにもなりうるもの（※4）。原始的なのだが、洗練を意味することもある（※5）。だから腰をが

※3 飾り気のない生のままの本質出口かつ入り口。ファンクはあらゆる場所に存在し、そしてなにかを放出するための手段であり、その存在を否定することはだれにもできないのだ（神子注）

※4 ファンクを言葉で表現するのは、ちょうど性的な恍惚感を文字にして書くようなもの。どちらも時間が空白になり、言葉がなくなつて、しびれるような感動だけが残るのである（青娥注）

んがん振って、とにかく踊りまくるのだ。よくわかんない、って？」「あなたの Loose Body (しまりのないケツ) の言うとおりにしてりゃいいじゃない？」

とだいたいこんなかんじのことを太子様は仰るのだが我にはわからなくて、真つ黒なバスで会場入りすると周りの出演アーティストたちに気を配りあわよくば暗殺しようとチャンスをうかがったのだが相手も同じようにうかがってたゆえできなかつた。そのうち主催者の摩多羅隠岐奈が口ドラムをはじめた。



「では、いっくぞーう！ だららららら……どうるどうるどうるどうる……ばばーん！ ハイ、これが一回戦の組み合わせ！」

すごいテンションが高い隠岐奈にひきずられて我らもけっこうアガつた。屠自古などは興奮のあまり、ハービー・ハンコック(※6)の『Chameleo』の最初のほうをボーパでやりはじめ、すると近くにいたヘカーティア・ラピスラズリがのってきてそのままずっといっしょにやっていた。

そうこうしているうちに一回戦第一試合目が始まった。はえある最初の対戦は、秋穂子と秋静葉の収穫系姉妹ファンク・ユニット『おいも Sept-ember Love』と博麗霊夢と東風谷早苗のセックスアピール系お笑いファン

※5 ファンク腺という分泌腺はまだ発見されていないが、ファンクと連動して体から分泌物がたくさんでてくることはたしかだ(屠自古注)

※7 ジャズ・ピアニスト、作曲家、編曲家、プロデューサー。ジャズとファンクをつなぐミッシング・リンクのような存在で、アルバム『Head Hunters』はそれまでジャズがもっていた顔ががらりと変えてしまった。いろいろあるのだが、かんたんかつ総合的な評を引用すると、「バップ・ジャズよりは軽

ク・コンビ『みこみこナンセンス』との闘いであった。ステージは溶岩の上に行くつもの鉄柱が立てられたテクニカルな足場で、白熱したファ波(※9)の撃ち合いが聴衆を熱狂の渦に叩き込み、コール・アンド・レスポンスのやりすぎで観客を含めみんな死んだ。

次に我らの出番がやってきた。対戦相手は、封獣ぬえ、鬼人正邪、古明地こいしのパンク・ファンク・バンド『濃いめ射精』だ。

いが、アフリカの美学を加えながら路上の次元と同化できているジャズのレコード」。

※9 ファンク衝撃波

2.2 PPP/PP vs 濃いめ射精! もう、出ない!

「おう、私たちの出番だ。じゃあなー!」

「またねー!」

第一試合のあいだ屠自古とヘカTはずっとボーイパしていて、アルバムの曲順どおりに三曲目の『SK』へ移行していたので「いいかげんにせよ」と言っ止めた。太子様を中心に円陣を組み、手と手を重ねあわせる。

「みんな静かに、耳をすませよ。聞こえるのはなんだ?」

「ええと、救急車のサイレン音ですか?」

「そう、たかぶった観客たちの期待の声(※1)だ。第一試合のときにいたのは全員死んだが、もう新しい観客たちが入ってきている。ほら布都、ちゃんと聞きなさい。わーっていつてるの、わーって」

「わーっ」

「そう。わーっだ。周りの死体にぜんぜんめげていない。むしろ逆にぶっちぎれて、パークス・アンド・レクリエーション(※2)に出たときのクリス・ブラット(※3)みたいになってる。大丈夫だろうか」

※1 あたかもみんなに歓声が聞こえるように仰られるが、実際は欲声なので太子様以外には聞こえない。

※2 アメリカのコメディドラマ。主演はエイミー・ポラー演じる架空の公園緑地課の中流役人で、ドキュメンタリーの撮影隊が出演者を撮影しているようなモキュメンタリー技法で撮られている。クリス・ブラットは「愛らしい本当のバカ」役として出演している。どのくらいバカかという点、あだ名のひとつが「ベニス振り子」。

「ハーブかなにかやってんのか？」

「私は大好きですわよ」

「私も好きだぞお」

「私も好きだ。で、そのようなクリブラ化※4した観客たちを相手に私たちはなにを見せていくのか、なにを見せてやれるのか。これは答えに決意をともなう問いだ。布都」

「はい」

よどみなく脱ごうとする青娥どのを我は当て身で気絶させて止めた。

「きまつているな。ファンクだ。いままで以上の、これまで一度もなかったような爆弾（トウゴウダマ）をステージに放り込み、爆発させてやるんだ。準備は良いな。さあ立って！ 始めるんだ！ 他のことは忘れて！」

「おおーっ！ 5Pー！」

太子様を先頭に、気絶した青娥どのをかついだ芳香を最後にして我らはステージにあがった。思えばここまででかいハコでやるのははじめてだ。我ら最近まで鹿島踊りの練習会に参加とかのドサ周りだったからな。

ステージは第一試合とうってかわって、濃硫酸が満たされたでっかいプールの上に細い木を継ぎ合わせて梯子のような足場を組んだものだった。

※3 『ガーディアンズ・オブ・ギャラクシー』のスター・ロード役で世界的に大ブレイク売れないころはハワイでホームレスになったり、男性ストリップバーにったりしてたらしい。信用できる裸族。

※4 全裸

「期待完了大威震八連制覇竜盆梯网闘開始。此地先戦士以外不可侵入」とハゲ頭のまわりにラーメンのどんぶりの模様をつけた案内役が宣言した。

ステージの反対側の『濃いめ射精』のメンバーと目が合った。全員が全員梢江とセックスしたあとの範馬刃牙のようなどうもうな相貌かおをしていた。

「闘始!」と王大人が叫ぶのにあわせて、濃いめ射精のベーススト、鬼人正邪が**(ボンツ)**とうねる太いベースを鳴らす。するといつのまにかその音が、ぬえのギブソン「160-E」の**(みよお〜ん……)**という音に変化している。フィードバック奏法だ。ビククリしてる我らを尻目に、すかさずFフオームのD、C、Gに小指のストレッツチをうまく使った**(デンデンデレデデンデンデレ)**とリフがつづく。あつげにとられてしまった。爆弾を放りこむつもりが逆に、有無をいわさず闘始ゼロ秒で爆発させられしまったのだ。なんてったってこれ、

「ビートルズじゃねえか!」

歌詞を無視して屠自古が叫んだ。

ここはメロンソーダ

作詞・作曲 The Beatles

編曲・替え歌 鬼人正邪

ベイビー あの子あたしにやさしい
ねえそうでしょ メロンソーダおごってもらえて幸せ
あたしあの子に恋してる それがあたし嬉しいんだ

あの子あたしはオレンジジュースだってそういうの
ねえちがうでしょ あたしメロンソーダでしょ
あたしあの子に恋してる これほんとのこと
それがあたし嬉しいんだ

ダイヤの指輪買ってあげる 打ち出の小槌振ってあげる
あんこもちのあんこを丁寧にこそぎとってあげる
ショコラ ショコラ あんこはショコラじゃない
ダイヤはジュエル
ああー

ここは渋谷 ここはメロンソーダ
かなりかさなる重低音が あたしの気分を刻むのよ
あの子の歌に胸がおどる
ターン・レフト・ライト・ストレート・レフト
運命待つ あの子を待つ たずねる心 ひそむ心
ハイパー・ハイパー・ハイパー・ハイパー・メロンソーダ
そうだオレンジジュースじゃねえ メロンソーダだ
お前のそういうところが経済をダメにするんだ
ああー



さてやってきました第二回楽曲紹介! 今回の曲は……なによ、5Pの曲じゃないじゃないのえ、なに? 『濃いめ射精』の……**ビートルズの『I FEEL FINE』**のカバー!? なんで?



イントロのフィードバック奏法と、ギターリフが印象的な名曲ね。オリジンのリフはジョンとジョージのギター・アンサンブルだったけど、濃いめ射精はぬえがひとりて弾いてるわ。



いやいや、ここ5Pの曲紹介するコーナーでしょ? 第二回にしてなんでいきなり別のバンドの紹介になってんのよ? 怒られないこれ?



いいよ。ファンク≒黒人音楽を語るにあたって、初期のビートルズを参照するのはあながち的外れでもないわ。濃いめ射精の奴ら、意識的かどうかはべつとして、いいと二つくじゃない。



うーん。ただひねくれてるだけだと思うけど……たしかにこのリフ、ものすごい黒っぽいフィーリングだ。ボビーのドラムが聴こえてきそうな……



それはツェッペリンの『Moby Dick』! ぜんぜん黒くない! まあ、同じフレーズだけども。でもこれ、さらに元ネタがあるのよ。ボビー・パーカーの『Watch Your Step』がそれ。



ボビー・パーカーってええと……アメリカのブルース/ロックギタリストね。「Watch Your Step」は61年に大ヒット、と。なるほど、ジョンはこれを聴いてリフをパクったのね。



影響を受けたと言いなさい。このように、60年代のイギリスのバンドは、アメリカの黒人音楽やロックンロールを自分たちなりに再生産するところからスタートしていたのだから話があるんだけど……。



あれ、でもこれ、さらにいうと、レイ・チャールズの『What'd I Say』じゃない?



気づいちゃった!

という楽曲紹介でわかってもらえたとと思うが、まあそんなのをいきなりやられたので我らは超びびった。しかしそんなときに頼りになるのが太子様である。

太子様は冷静にこう指示をくださった。

「布都、まずは気絶したままの青娥を起こさない。いきなりビートルズはたしかにどぎも抜かれたが、さいわい彼女たちはパンクバンド。テクニクはない。私たちがいつでもどおりのファンクネスを表現できれば、負ける道理がないさ」

このときの太子様はティム・バートン版のバットマンのような邪悪な顔をしていた。この顔をしたときの太子様に敵はいない。我はすぐさま青娥どのにカツ！と活を入れて起こした。起きて二秒間くらいはふらふらして、水のない場所のカエルのようにたよりない顔をしていたが、さすがの邪仙すぐに状況を把握し、我らの曲がはじまっていることを聴きとるやいなや芳香と目線を交わし、ばっちりのコンビネーションで歌い踊りはじめた。ぬえのギターリフにシヨックを受け、実力行使^{※1}に出かけていた屠自^{※2}古も、気を取り直して彼女の持ち味である髪や腕をふりまわしたワック^{※3}なダンスをはじめた。出遅れたのは我だった。

※1 ストリートファイターシリーズのブランカの必殺技

※2 七〇年代初めにゲイクラブで生まれた、腕を鞭のように振り回したり、体に腕を巻きつけるよう動いたり、胸の前後のしなりやツイストが特徴的な激しく躍動的なダンス。とてもセクシー。

心の準備ができていたかというところではない。ただ、太子様やみな
の勢いに押されて、声が口から勝手に出た、というだけのこと。右手のマ
イクに向かい、我は大声をあげ、その声はPAを通じて、うねり蛇行しな
がら、ぎらぎらしたよだれを垂らす肉食の獣のように、あるいは弾丸のよ
うにまっすぐに、聴衆たちへ飛びかかった。ビートルズにポカーンとしつ
つうおーっとなっていた観客どもがこちらを向きはじめた。甲高い、金属
でできているような芳香の声。硬くて甘いキャンデイのような太子様の
声。そのうち脱ぐんじゃねえのという期待感をたたえた青娥どのの流麗な
ヴォーグ(※3)、屠自古のない脚をいかしたダイナミックなタップ・ダンス(※
4、それらが統一感をもちつつも、やっぱりちよつとずれていて、ちゃん
と見ればへたくそでへたっぴで、でもそれらぜんぶが我らのステージをか
たちづくっていた。我はもう夢中で、なにがなんだかわからなかった。こ
んなに大きな舞台で、大勢の客どもの前で歌うのははじめてなのだ。マイ
クを落としたり、振り付けを忘れてたりしなかったのは、雪山で山ごもりを
して特訓した成果だろう。そんなかんじでようやく真価を発揮できた我ら
だが、しかし濃いめ射精もまだまだ負けていかなかった。奴らはまだ死んで
いなかっただ(※5)。

※3 幻惑的で洗
練されたクラブ・
ダンスでありスト
リート・ダンス。
いくつか種類があ
るが青娥どのが踊
るのは幾何学的な
手先の動作が強調
されたニューウェ
イ。端的にいうと
「マドンナみたい
なやつ」。

※4 どうやっ
とるのだ? (布都
注) わからん(屠
自古注)

※5 死んでるの
は私たちだぞ(芳
香注)

バンドのなかでは影がうすいほうで、いつもたんたん演奏している印象のドラムの古明地こいし^(※6)が、曲の合間で思い切りガシャーンとシンバルを鳴らし「**POW!**」と叫んでお昼どきのとんかつ屋の行列に割り込むように強引にドラム・ソロをはじめました。我らどころか、バンドメンバーのぬえと正邪も驚いたようすだったが、我らとおなじで奴らにも練習で培ったKUNUNAがある。アイコンタクトすら必要とせず、奴らはドラムを支えるように弾きだした。まるでターンバトルのようで出来すぎだが、じっさい今度は奴らの攻撃の順番で、よそおいを変えた濃いめ射精の新たなフア波が我らを襲った。芳香が肩を撃ち抜かれてうがーっとうめいた^(※7)。長い長いドラム・ソロがいいかげん終わりそうになるそのタイミングで、ぬえがまたリフをはじめた。

デンドデレレレデンドデレレレ デンドデレレレデンドデレレレ

「今度はMoby Dickかよ! こんにちは!」とまた屠自古が叫んだ。さすがにまた楽曲紹介をやるのはどうかと思うのですが、まあだいたいおなじリフなので観客たちもほえ?とほえ面をかいたものの抗いがたいロックの魅力に耐えきれず、すぐに愚地克己vsピクルの試合を見ている神会カラテのみなさんのような宗教的な感じになってケミストリーしはじ

※6 べつに能力を使っているわけではなくて、我とおなじでバンド内ではそんなにアピールするタイプでないというだけである。しかしファブ人気は異様に高く、第十一回東方人気投票で世界一位こと霊夢を蹴落としていきなり一位になった。ほんとはびっくりした。

※7 キョンシーなので大事にいたらなくてよかった

めた。さすがツエツペリンだ。

もちろん、我らも負けてはいない。そっちがZEPならこっちはPerfumeだといわんばかりのMan Machineなダンスをはじめ（やっぱりちよっとずれていたけども）。両者のファンクは拮抗し、押し合う互いのファンクネスがステージのまんなかで宙に浮いて大きなファンキーソウルをかたちづかった。ちよっとでも気を抜いて、押し負けたほうがすべてのファ波をくらいアフロになってしまおうだろう。

「うおーーーーーっ」

「ぬわーーーーーっ」

我らと濃いめ射精は持てる力のすべてを使って闘った。しほりきってしほりきって、ついには向こうのリーダーの正邪が「もう、出ない!」と叫ぶほどだった。リーダーの叫びに動揺したぬえが、パンクバンドらしくちよっととちった。するとまんなかで浮いていたグルーヴの塊が均衡を崩し、濃いめ射精のほうへゆらゆら動きはじめた。我らは一瞬、闘いを忘れて叫んだ。

「あぶない! よけろーっ!」

「死ぬぞーっ!」

そのままであれば、濃いめ射精にすべてのファンクが炸裂し、我らは勝利していただろう。しかしそうはならなかった。激しい闘いに耐えきれなくなった闘場^{ステージ}がきしみをあげ、細い木を継ぎ合わせて作った梯子のような足場がばらばらりとバラバラになった。我らは全員ウワーツと叫び声をあげ、真下の濃硫酸のプールに落ちてしまった。

2.3 あのバンド

濃硫酸で体が溶けてすっごく痛かったが、なんとかプールから出ると、観客たちが我らに惜しみない拍手をおくってくれた※1。ぱちぱちぱちぱち、という音で会場がいっぱいになりこだまして、ここがスキー場なら雪崩がおきそうであぶないなと思うくらいだった。我、とてもうれしくって、ウツヘツへと笑ってみないと顔を見合わせ、ついでにようすをうかがうと、濃いめ射精の奴らもひねくれた調子ながらもうれしそうにしていた。観客にむかって、全員でぺこぺこおじぎをした。それから体が溶けているので医務室に行って、戻ってきたときには協議がおわり我らと濃いめ射精の勝敗について裁定がくだっていた。



「残念ではあるが、引き分けの勝負なしで、両者敗退とする。5Pも濃いめ射精も二回戦には勝ち上がらない」

「ええーっ」

「だってあんまりファンクじゃなかったし」

「いまさらそんなこと言われても(汗)」

※1 いま考えると服も溶けて半裸だったからかもしれぬ。

主催者の摩多羅隠岐奈の通達に、我らはぶーぶー不満をいい、とくに太子様は二十巻ごろのガッツ※2のような忌まわしい顔をされていたが、しようがないので引き下がった。楽しみにしていたサガファンクフェスティバルで、我らはなんと、一回戦で敗退してしまっただった。みんながっかりした。とくに太子様の落ち込みようときたら尋常ではなく、私の「君、江ノ島に行ったんだって？ しょうなんだよ」というギャグにもぜんぜん反応しないくらいだった。屠自古も青娥どのも芳香も、みな一様に沈んだ顔をしていた。わりあい元気だったのが、我だ。

なぜかっていうと、我、このごにおよんでも、なぜ自分がアイドルをやつとるのか、ようわからなかったのだ。歌ったり踊ったりするのは、やっぱり好きになれなかった。さつき観客にほめられたときは、そりゃあうれしかったけど、でももう一度やりたいかという、そんなことないなあ、というかんじだった。

帰ろうと思った。でも音楽は鳴り止まない。我らが落ち込んでいるうちに新しいステージが作られ、次のアーティストたちの対戦がはじまっていた。その音がホールからもれて、廊下を進み、我らのいる楽屋まで侵入してくる。そのこれでもかと**The One**が強調された滑らかで力強いベースを

※2 モズグス様と戦ったころ

聴くと、さっきまで『ALIアリ』に出たときのウィル・スミスのような顔をしていた太子様がいきなり立ち上がり、楽屋を飛び出ていった。我らはあわてて後を追った。

会場の扉をばーんと開けると、ちょうどあのバンドが、対戦相手の『響け！たくましいズ』(※3)をくだして勝利を決めたところだった。ステージはなんかトゲがいつぱいついたトゲトゲなところだった。



キター

裊田阿求

ボーカル

パチュリー・

ノーレツジ

ベース

姫海棠はたて

ドラム

八雲紫

キーボード

宇佐見薫子

※3 神綺(歌)、夢子(カスタネット)、ルイズ(トライアングル)、ユキ&マイ(ハンドベル)、アリス・マーガトロイド(ドラム・ティンパニ・フルート・オーボエ・クラリネット・サククス・ファゴット・コントラバス・グロツケン・ヴィブラフォン・シロフォン・マリンバ・トランペット・ホルン・トロンボーン・チューバ・ユーフォニアム) かなる吹奏楽部系ファンクユニット。魔界の公用語は京都弁。

前年の天下一ロック大会で優勝し、それからなんかこうすごい勢いで伝説になった伝説のロック・バンド、『**パープル・すみれ団**』のオールメンバーがそこにいた。我らのアイドル衣装よりもド派手でキラキラした衣装を着ていて、シックとかモノトーンとかそういう言葉をしらないカラフル星からやってきたカラフル星人のお祭りのようだったが、それがこのうえなくきまっている。ベースもギターも、みたことがないような変なかたちをしている。汗だけで、照明の光が衣装のスパンコールと汗の粒とで乱反射していて、まるでメンバー全員が宝石^{ジュエル}みたいだった。

太子様は全速力のまま、いっさい速度を落とさずに、一直線に最前列まで駆け抜けた^{※4}。ステージの真下につくと、さっき楽屋で聴いた、あのベースを弾いたベーシストに向かい、まるで恋人にそうするように叫んだ。

「**姫海棠先輩!**」

※4 太子様はえらいのでまるでモイゼが海を割ったように観客が割れた。